民権から初期社会主義へ

―マイノリティとしての一農民の軌跡―

林　彰

はじめに

小論は、千葉県の北総地域における一農民＝小泉由松の思想やそれに伴う行動を追うことを目的にしている。私はこれまで日本近代思想史をテーマにして、初期社会主義、修養思想など、またそれに関わる周縁について、少しく論じてきた。[1] 初期社会主義に関しては、主として千葉県印旛郡の農村における初期社会主義結社北総平民倶楽部の活動や思想、倶楽部会員たちの足跡などを踏まえ、「村落社会主義」思想の意義づけなどを分析してきている。[2] 最近では、地域の自由民権思想・運動を人物やそれにかかわる私塾雑誌などを材料にして初期社会主義までを追っている。

もともと初期社会主義への問題関心には、治安警察法（一九〇〇年）を制定されたことにもよるが、そのはじめから労働者階級を組織とすることなく先駆的な知識分子、すなわち現実に労働運動に基盤をもたない少数の知識人・学生・独立生産者に担われながら権力と相対していく。また、そういった弱点・限界がありながらも、当時の中央の社会主義者の代弁する民衆はそのほとんどが労働者であり、農民に言及する視野が労働者よりはるかに少なかったということは周知の事実である。若干取り上げることはあっても、おおよそ文筆活動をもって地主制度・小作人問題をとりあげ、その根本的解決として土地国有、社会主義の農民問題への適用を主張したにとどまり、現実の農民・農村問題にはタッチしなかったのである。すなわち、農民問題の欠落―とくに現実的・具体的な農民・農村問題について―を示しているといってよい。こ

のことは、当時の「社会主義」が社会問題に触発され、もっぱら「都市社会主義」の分脈のうちで展開されてきたことにも原因があろう。

一方、日本における近代思想史の潮流は、啓蒙主義→自由民権→平民主義→初期社会主義→大正デモクラシー→ファシズムへと続くが、そして、それをおおうようなかたちで天皇制思想が存在する。ただし、地域においてはいささか異なった様相を呈している。例えば、民権から初期社会主義へ進む人物には、中央では幸徳秋水や福田英子[3]らがいるが、地域においては全くといってよいほど事例はない。民権運動にかかわる地域民衆は多いが、初期社会主義にかかわる民衆はほとんど存在しない。その意味において、初期社会主義にかかわる民衆はマイノリティといってよい[4]。同時に、民権から初期社会主義へと移行する民衆は、さらに稀といえるだろう。

小論では、民権思想をもちながら初期社会主義者へと移行する一民衆＝農民を取り上げていく。この人物＝小泉由松については、すでに少しく論じてきている[5]。ここでは、さらに別の史料を利用して、彼の全体像に迫ってみるつもりである。もともと、地域のこうした人物については、一次史料がほとんどないといってよいが、小泉由松については若干発見されており、小論もそれを元にしている。

一　小泉由松の足跡―民権期の思想

千葉県印旛郡出身の小泉由松は、もともとは香取郡臼作村（現在成田市）の葛生利右衛門の次男として、一八五九（安政六）年旧暦三月に生まれた。その葛生由松が、いつ頃かは不明だが、下埴生郡（一八七八年埴生郡から分かれる）成毛村（現在成田市）の農業を営む小泉家に婿入りしている。妻やす（一八六三・文久三年旧暦九月生まれ）は、父親小泉太兵衛と母よしの長女であった。小泉由松の長男の啓蔵は、戸籍によれば一八八三（明治一六）年一月に生まれていることから、妻やすとの結婚は一八八一（明治一四）年前後、つまり小泉由松の二二歳前後ではなかったかと推測される。だとすれば、小泉由松は自由民権期に青年時代を過ごしたことになろう。

成毛区有文書（成田山霊光館所蔵）の一八七二年の埴生郡成毛村戸籍簿によれば、成毛村の戸数は二九戸、人口も一七四名（一八八九年三月現在）の小村であり、戸数は印旛郡に合併された明治二〇年代以降においても変化はない。明治前半期の小泉家の土地は、田畑九反一畝、山林九畝、合わせて約一町歩余りの土地所有者であり、村内においてはほぼ平均に位置しているといえよう。小泉由松の子孫の小泉利夫氏への私の聞き取りによれば、かつては家屋敷が三〇〇坪ほどあり、家の周囲は板塀で囲まれ、長屋門があったといわれた。しかしその成毛の家は、一九八八年に取り壊され、現在は誰も住んでいない。

小泉由松は、少年期から青年期にかけての思想形成に関する史料がないため、具体的な行動形態は不明だが、残された史料で青年期以降を含めてみていくことにする。彼は婿入りしてから、近隣の漢学塾の斯文塾に通ったことは判明している。斯文塾は成毛の隣の大生（おおう）村で、横田対山が一八七八年自宅に設立した漢学塾である。残存している史料で、小泉が最初に出会う漢詩は、一八八六年三月に「皇朝精華集」の筆写―古代から明治期までの名の知られた人びとの漢詩―であり、菅原道真をはじめ足利義昭・武田信玄・太宰春台・柳川星巌・真木保臣・大沼沈山・小野湖山・成島柳北らであった。小泉が参加し、あるいは結成していく漢詩文サークルでは、一八八七年に開催された北総有志五〇有余名が参加した詩文会が最初であった（「詩文会記」『小泉利夫家文書一〇』（以下、『文書』と略記する）。この塾の経営者の横田対山に、小泉は常に漢詩の添削を依頼しており、その史料が多くみられる。この地域には横田を師と仰ぐ農民が多く、彼の碑文（頌徳碑）には三〇〇名の弟子の名前が刻まれているが、そのなかにはこの地域から、のちの初期社会主義運動に参加する葛生新治郎や香取弘などの名前がみられた。

ところで、小泉由松の民権思想の形成はどうであったろうか。残された史料から判明する彼の思想形成は、まず学習するところから始まるといってよい。たとえば幕末維新期の著名人の言語録を筆写を通した理解、啓蒙思想家の言語録の筆写を重ねることにより、知見を深めていくことであった。事例を挙げれば、前者では木戸孝允・大隈重信・加藤弘之・矢野文雄・田口卯吉・ディズレーリ・植村正久・カーライル・西郷隆盛・桐野利秋・穂積陳重・渡辺洪基・大鳥圭介・有栖川宮熾仁・井上馨・伊藤博文・谷干城らであり、後者では福沢諭吉・森有礼・中村正直・西周・西村茂樹・津田真道・箕

作麟祥の筆写がみられる。[6] 小泉は彼らの言説をノートに筆写していくが、何を参考・参照して写していたのかは、いまのところ不明であり、草深い田舎にどういうルートで中央の書籍・雑誌などが入ってくるか、あるいは新聞を何らかのかたちで読んでいたのかは、これからの課題である。そして、小泉の自由民権学習は、明治一〇年代後半前後から二〇年代初めにかけてではなかったかと推測される。片田舎の一農民である小泉も、他の青年と同じように政治や政治思想、民権思想などに関心をもっていたということがいえる。板垣退助・後藤象二郎・中島信行・末広重恭・植木枝盛・島田三郎・星亨・草間時福・肥塚龍・青木匡・箕浦勝人らの民権家の筆写は、その証左であろう。[7] では、具体的にどのような言説を筆写していったのか、若干みておきたい。

「余ガ平生ノ志ハ天下ノ政党ヲ改正スルコトニアリ、今日我国人ノ精神ヲ喚起スルニハ必ズ欧米ノ新主義ヲ以テセザルヘカラス……吾党ハ遂ニ我自由主義ヲシテ亜細亜全州ニ傍礴普及セシムルコトヲキセサルヘカラス」（板垣退助）

「曰ク凡ソ何レノ国ニテモ政治上ノ統合ヲナスニハ其当時ノ必要ニ応シ大目的ノアル所ロニ従フテ活動スルカ政治家ノ急務テアリマス」（末広重恭）

「曰ク現時ノ日本ハ実ニ内憂外患ノ二大困難ニ攻メ立ラル、ノミナラス法律権ト理財権ノ二個ヲ失脚シ独立ノ全テヲ得サル憫レムヘキ国柄ナリ其故ハ治外法権ノ在ルアリテ外人ニ対シテ我国ノ法律豪モ其作用ヲ為ス能ハス（略）」（後藤象二郎）

この当時、小泉由松が啓蒙思想家や民権家をどれほど深く理解できていたか、あるいはその違いを把握しえていたかは不明であり、同時に小泉の周辺に民権運動に関心をもつ人びとがどれだけいたかどうかも分かってはいない。ただ、小泉のような人物が大勢いれば結社が設立されても、何ら不思議ではない。小泉の民権思想の形成は、まず民権学習から始ま

り、その後それを理解して民権思想へ到達していくように思われる。筆記して学ぶことにより、それが民権学習にとって十全の成果ではないにしても、学習の経験はのちに生かされる可能性があるであろう。それでは、明治一〇年代のこの時期、下埴生郡の地域における民権運動はどうであったろうか。少しく指摘しておきたい。

明治一〇年代前半、近隣の長沼・荒海・飯岡・南羽鳥・北羽鳥地域では国会論が論じられており、国会を開設するかどうかの「可設論」「不可設論」の二派に分かれて議論となっていた。[8] その前提として長沼事件があり、[9] さらに、一八七九年六月に長沼村の小川武平を社長とする自立社という民権結社が誕生している。[10] この結社は、社長小川武平をはじめ七二名の発起人がおり、一八八〇年一月東京の交詢社結成後、両方に加盟する社員も増加し、そうしたなかで国会開設の是非の議論が登場してくるのである。さらに、一八八三年一一月から成毛村の隣りの土室村の小倉良則ら五名は、下埴生郡において減租請願運動を起こし、一八八四年六月には建白書を起草中であると伝えている。[11] この背景には、一八八二年一一月の自由党臨時大会の席上、片岡健吉が減租建白運動を「滞京委員」に対して提案をし、それを受けて千葉県でも開始するに至ったといえる。小泉は、隣村の小倉良則の行動は知っていた可能性が高く、一八九二年に自由党衆議院議員となった小倉良則に関する史料がみられる。[12]

次に、小泉由松のもう少し具体的な民権学習についてふれてみよう。一つは、国会請願書の筆写であり、例えば岡山県の国会開設請願書の写しがある。[13]「（一、二字不鮮明）両備作三国々会開設願望同盟兄弟相告ルノ言」とあり、作成者は県議の忍峡稜威兄（おしおいずえ）であった。これは岡山県の第二回国会開設請願への取組みのなかで発表された一八八〇年一〇月のことである。この背景には、茨城・長野・山梨・新潟の四県代表から一〇月末に全国有志者が東京に集まり、ともに請願しようとの呼びかけがあり、それに基づいている。この「相告ルノ言」を写した小泉は、おそらく背景などは理解できなかった可能性が高いが、本文を読むことにより民権運動の請願への努力や「哀訴請願」への意気込みなどの雰囲気の幾分かは伝わっていたであろう。また内容は略すが、二頁余りの小西甚之助が起草した「伊藤公外九参議へ宛差送リシ国会請願御取持願ノ文」がある。この請願には日付はない。さらに、[14] 小泉は民権学習に欠かせない憲法をも筆写している。「英国憲法第壱号」と題して、一八八九年一月に筆写したとあり、これは明治憲法発布、帝国議会開設に備えて写した可能性があろ

う。英国憲法の項目には、「皇帝ノ司法権」、「皇帝ノ行政権」、「上院ノ組織及ヒ権限」があり、一二頁にわたり筆写している。

こうした民権学習や憲法学習を通じて、小泉由松は「自由」「民権」「人権」「権利」などを含めた自由民権思想や少しの運動の動向などを学ぶことにより、民権思想（運動）を自らの経験として蓄積していくことが少しはできたように思われる。同時に小泉は、一八八八年一月にある懇親会の席上において、「演説ニ聴衆ヲ感動セシメ喝采ヲ」博するための論説組立法の演説をしており、その内容は「論説組立法」（『文書一一』）を元にしていた。彼は「西洋翻訳書」を読み、論説組立法の概略を記憶したので、その概略を述べたのである。組立法には「上昂法」「降下法」「比較法」など六種類あり、それを具体的に説明していくが、字数の関係で略したい。その外、小泉は帝国議会開設に向けてもその感慨を示しており（「元日ノ感」（一八八八年）『文書一〇）、民権学習などの成果が彼の民権思想を含めた政治意識や政治思想の高まりになっていくように思われる。

二　初期社会主義運動への参加の前提
―政治家への接近と文化運動―

小泉由松が政治家に接近するのは、いつ頃かは不明だが、民権学習及び民権思想の習得後、政治や政治家に興味がわいてくるのは必然のことのように思う。政治家への関心は明治二〇年代前半から明治四〇年代にまで及ぶ。ただし、政治家との接触は年代不明の書簡などが多い。当初は地域の選挙運動を通じて藤江東作（安食町）らを支援しており（明治二〇年代前半）、一九〇二年総選挙に際しても、小泉は平山晋が立候補して落選したときに支援したことがあり、藤江から礼状などが来ている。[15] また小泉の選挙運動支援における著名人は、県内の元民権派新聞『総房共立新聞』の社長であった桜井静が挙げられる。一九〇三年三月、桜井静から小泉に選挙運動協力の礼状が来ている（『文書』六九）。このときは第八回総選挙であり、山武郡から憲政本党より立候補した桜井は、第七回総選挙に次いで当選しており、「旧誼ニ依リ一方ナ

ラザル御賛助ヲ蒙リ」とあるので、以前から小泉と桜井は面識があったことがうかがえよう。選挙協力は他にもあるが、省略したい。

続いて、小泉由松が著名な政治家に接近していく事例を紹介しよう。河野広中・尾崎行雄・鳩山和夫・犬養毅といった、いずれも進歩党系の著名人が中心であった。まず、当時憲政本党にいた河野については、一九〇一年正月に年賀状が来ており、同年四月には小泉が河野に何かを贈ったらしく、その「頂戴物預り」の礼状が来ている。おそらく、小泉の方から接触を図ったと思われ、もっと以前から、つまり自由党衆議院議員の頃から接近していた可能性がある。河野からは、一九〇四年、一九〇五年、一九一〇年の年賀状も来ており、また年代不詳ながら書物の問い合わせをしていることもあった。[16] 小泉は、河野広中が民権運動などで活躍した過去を知悉したと思われ、そういう著名人と接近をはかることは自身の行動を正当づけ、かつての民権学習の経験を生かすことにもつながっているであろう。さらに尾崎行雄に関しては、一九〇九年六月に尾崎の父親の喜寿の祝賀に「高吟」を贈り、その礼状が来ている。また、年代不詳ながら、尾崎から庭園拝見願い（大隈重信の庭園）への了承の返事が来ている。[17] その外、内容は省略するが、鳩山和夫・犬養毅とも、問い合わせなどの連絡を取り合っていることが判明している（『掛け軸文書』2―1・2、3―4）。そして、小泉には自身が政党に入党した可能性のある文書も発見された。これは年代不明だが、関和知からの返書の書簡で「本党への御入党」の件が了承されたとある。しかしながら、この史料だけでは憲政本党に入党したかは判然としない。これは課題として検討していきたい。[18] 小泉由松が、なぜ進歩党系を支援していくかは、いまのところ不分明であるが、彼は一八九七年から発行された県内の進歩党系の新聞『新総房』の通信員を当初からやっており、新聞社側は「大ニ便益ヲ得候段拝謝」していたことが判明する。[19]『新総房』の前身は民権派の『千葉民報』（一八九四年刊）であり、二年後『新総房』と改題し、政治雑誌として再発足をして、さらに新聞形態に改めた。小泉は、「同志諸賢」の一人として通信員の役割を果たし、地域の政治・社会・文化などの動向記事を送っていたことが知れよう。

こうした小泉由松の政治家への接近は、民権学習・民権思想を包含した政治思想を形成していく上で、少しは役立つといえるだろう。同時に、明治二〇年代には地域の文化運動にも貢献しており、それについて若干ふれておきたい。小泉の

明治一〇年代の漢詩文サークルについては、すでに先述しているが、これも一つの文化運動といえる。漢詩文について小泉は、明治三〇年代、四〇年代も継続してノートに記していくが、明治二〇年代に二つのサークルに関係する。一つは北総青年倶楽部への参加であり、もう一つは印東文話会の結成である。まず前者については、これに関する史料はほとんど残っていないが、年代不詳の倶楽部結成の趣意書があり（『文書』一六〇）、それによれば倶楽部の本部は遠山村で創立員は中野保光ら四名、「文学研究交誼」が目的であり、隔月一回雑誌を発行し、部員各位に頒布して一層の親交を結ぶとある。投稿は「詩文歌随意」とあり、第一号は八月二五日発行予定であった。また、小泉ら三名宛の倶楽部からの封筒のみが残っており、封筒裏には「第一一〇号　明治二五年七月二五日」（『文書』一七八）と記されていた。「第一一〇号」は通信の回数か、雑誌の号数かは不明だが、この数字はこの地域において「文学研究交誼」が盛んであることの証左とみるべきではなかろうか。

他方、後者の印東文話会は、一八九六年春に小泉由松と小泉宗作と根本（教員で姓のみ判明）の三名が中心であり、日清戦後における青年の責任は重大であるとして、将来の日本に貢献すべく「道義」と「知勇」とを「講究錬磨」したいとする。[20] 具体的には「文話」とは、会員がお互いに文章と言論を闘わし、これにより各自の道徳と知識を進め、将来の「日本帝国」に尽くすことが目的であるとした。小泉は印東（印旛沼の東側）の各青年諸子と言論と文章を闘わせることにより、自らの政治意識を高めようとしていくが、三国干渉への批判もしており、ナショナルな政治思想をもつ地域青年が増大したことは確かであろう。当初は一〇名弱の会員で発足した印東文話会は、その創立会では小泉が座長であったが、以後の動向は史料不足のため判然としない。

こうみてくると、小泉由松は民権学習や民権思想の受容をへて政治家への接近や選挙活動を支援しており、同時に地域における文化運動が政治意識や精神を鍛えていったことは確かであろう。彼が初期社会主義運動に接近する前提には、以上のことが考えられ、それはある事件を契機に一気に飛躍していくように思う。

三　初期社会主義者としての活動

小泉由松が、この地域に誕生する初期社会主義結社の会員として参加する一つの要因として、一九〇一年五月に起こった『新総房』の社会民主党事件があげられよう。社会民主党事件とは、進歩党系の『新総房』が日本最初の社会主義政党である社会民主党の綱領並びに宣言書を掲載して告発され、『毎日新聞』や『万朝報』などの全国紙や雑誌『労働世界』とともに、発売頒布の停止を余儀なくされ、罰金を払わされた事件である。地方新聞では『新総房』のみが宣言書を掲載しており、控訴・上告したが、一九〇一年一〇月大審院において上告は棄却された。社会民主党は、周知のように「社会主義を経とし、民主主義を緯として」誕生し、「社会民主主義」を標榜して自由・平等・平和主義の抱負を掲げた。普遍的内容をもつこの党の「理想」の骨格は、現在も依然として遠い目標にあるが、当時『新総房』の通信員をしていた小泉は宣言書や綱領、さらに社会民主党事件をどのように把握していたかは判然としないが、社会民主党を肯定的に捉えており、それゆえこの地域では初期社会主義結社の結成へとつながるとみてよいだろう。宣言書を掲載した『新総房』のみだけでなく、県内においては政友会系の『東海新聞』や『千葉毎日新聞』といった有力紙も、新しい近代思想である「社会主義」に理解を示しており、二〇世紀をむかえて県内のジャーナリズム界のもつ自由主義的な雰囲気と在野性は健在であり、帝国主義・社会主義論争のような議論も紙上で論じられている。[21] のちに、ともに北総平民倶楽部の会員となる隣りの地区の幡谷に住む海保金次郎に宛てた一九〇二年一二月下旬の書簡には、政治・経済・社会的な内容を含んでおり、日常的に小泉は政治社会的なことなどを語っていたことがうかがえる。[22]

一九〇五年一月の日露戦時下、中央の平民社の影響をうけ、印旛郡八生村・豊住村・久住村（いずれも、現在成田市）の青年を中心に初期社会主義結社である北総平民倶楽部が誕生した。幹事はいずれも二〇歳代の小川高之助（八生村宝田）と根本隆一（豊住村南羽鳥）であり、月一回の例会を開き、当初は一五名の会員で出発した。倶楽部のなかでは年長者である小泉由松（四五歳）は、久住村成毛からは唯一の参加者であり、倶楽部内では顧問格のような存在であったとみられる。倶楽部内における活動や思想は、すでに述べたことがあり、[23] ごく簡単にみておきたい。倶楽部前半期の活動で特

筆すべき活動は、平民社の運動方針の一つである普選運動の実践――一九〇五年一二月の衆議院補欠選挙に白鳥健を立候補させ、六名中四番目の二二六票で落選――であり、これには小泉も奔走しているが、かつての進歩党系議員の選挙運動の経験がこういったところで生かされているといる。また、一九〇六年一月中央において日本社会党が結成されたとき、倶楽部会員では小川高之助や小泉由松をはじめ五名が党員となり、これは千葉県内の日本社会党員六名のうち五名をしめており、小泉自身のもつ積極性をみてとることができる。倶楽部後半期では、日本社会党解散後に片山潜らの議会政策派の唯一の地域結社として倶楽部の活動を再開、座間止水の影響を受けて、地域に根ざした「村落社会主義」思想の実践を考え続けていくのである。[24]

ところで、初期社会主義結社の北総平民倶楽部が活動していた倶楽部後半期における小泉由松の動向を、少しく追ってみよう。一九〇七年七月、倶楽部総会において役員（評議員）選挙があり、小泉は根本隆一・坂宮半助・海保金次郎・白鳥健ら八名のうちの一人に選出された。また、新たに規約を編成して、一条で「本倶楽部は社友的組織とし、北総平民倶楽部と名称す」、三条「本倶楽部は労働者の幸福を増進するを以て目的とす」などが決められた。[25] 小泉由松は、行動記録のようなものとして「漫筆手帳」を持参しており、〇七年当時、彼の息子の啓蔵夫妻には子供があり、この時期ある程度自由に行動できた可能性があった。[26]「漫筆手帳」において、小泉の筆写した研究会日誌の一部を引用したい。

〇同会第一の初会は宝田区寺本源兵衛氏の宅にて開きたり、来会者七名なり、諸子の席上演説ありて頗る趣味を極めたり、時は維れ旧の六月一五の秋にして恰も満月なり、第二の研究会は旧九月　日幡谷区海保金次郎氏の宅に開きたり、来会者二十八名。千葉町東海新聞の記者座間鍋司（止水）氏来賓として出席し村治の政策に関する有益なる談話いたされしゆえ、来会者孰れも満足に閉会せしは午後十一時頃。

〇四十一年研究会日誌

正月二十五日開会。寺本源兵衛方　図書借読書を設立することを定む、午後六時より会員の演説あり（以下、省

略）。

史料の書き始めの箇所の「同会第一の初会」に年代が入っていないが、分脈からみれば一九〇七年であろう。小泉は旧暦で書くことが多く、書簡もそうである。一九〇八年一月二五日の研究会は、西川光二郎らの『東京社会新聞』にも掲載されており、参会者は三六名とある。史料の「図書借読書」の設立とは図書館設置のことであり、以前小川高之助の提案した図書館設置の件が全員一致で可決したのである。倶楽部例会は主に八生村宝田と久住村幡谷で実施されるが、小泉の自宅で倶楽部総会が開催されたこともあり、一九〇八年七月のことであった。このときは役員の改選と社会主義の伝道の方法が話し合われている[27]。また、小泉の演説の内容については不分明であるが、演説の論題は「国家の概念」「増税について」（一九〇八年四月一日）、さらに一九〇九年二月六日の「同志懇親会」では、「国体と社会主義」について演説しており、国体と社会主義は決して矛盾するものではないと述べている（『社会新聞』一九〇九・二・一五）。この国体と社会主義は矛盾せず、当時の国体のなかで社会主義を実施できるというのは、片山潜の影響である。つまり、ここには国家権力の本質や帝国憲法、天皇制を理解できていないということが分かるだろう。当時、片山潜は明治憲法下において社会主義を実現できると、ずっと楽観視していた。これについては、彼はのちに反省することになるが[28]。小泉のもつ「漫筆手帳」には、倶楽部関係の記事以外に、日本の歴代内閣、千葉県会議員の名前、選挙関係記事、明治初期から一〇年代までの民権運動を含めた政治史、農業に関する慣例規約、格言、短歌（皇后の短歌を含め）、片山潜・河野広中らの住所録などが雑多に記されている。これをみると、特別に社会主義思想のみを、いつも考えていたわけではないと思われ、それはある意味では当然なのだが、やはり中央の幸徳秋水・片山潜ら初期社会主義者のもつ思想とはズレがあり、地域の倶楽部会員のレベルとして一人の民衆＝農民として、新しい近代思想である「社会主義」思想を受容していくのであろう。ここには、この時期村会議員となり、倶楽部内での理論家であった小川高之助とも、異なる道であったといえよう。

小泉由松は倶楽部後半期においても、例会の出席率はよく、さらに年長で評議員を兼ねているため、倶楽部内における位置は相対的に高いと思われ、評議員のみの会合にも、五キロ以上離れた宝田の倶楽部事務所によく出席をしていた。当

時、会員は七〇名ほどいた（一九〇九年二月現在）。そして、倶楽部の活動を続けてきた小泉由松は、「大逆」事件容疑者の検挙が始まったころ、すなわち一九一〇年六月に五一歳で死去した。同時に「大逆」事件の影響は、議会政策派新聞である『社会新聞』の地方読者にまで及び、北総平民倶楽部は自然消滅したかたちで終息をむかえることとなった。倶楽部の幹事である小川高之助や根本隆一らには、刑事の尾行が大正時代になっても付くことになるのである。(29)

おわりに

これまで、いささかマイノリティとしての一農民＝小泉由松の動向を、決して十分ではないが、追ってきた。小泉由松は自身の向学心により、自由民権・憲法学習、国会開設運動などの事例を学びながら、自身の知識・思想を深めており、彼なりの政治思想や政治意識を獲得し、地域の選挙運動を通じて政治家や民権派知識人に対して接近を果たしていく。これは、五日市の民権運動のような活発な地域の「学芸講談会」や「学術討論会」といった民権結社と比較すると、小泉の場合は孤独な個人的営為に過ぎないかもしれない。印旛郡は佐倉をはじめとして進歩党系の支持者や結社が中心であるが、なぜ、小泉が進歩党系支持をすることが多いのか、あるいは進歩党系の『新総房』の通信員となったかは、桜井静らの影響があったかもしれないが、今後の課題としたい。そして、新しい近代思想である「社会主義」を、社会民主党事件を通して受容していく契機になるように思われ、さらに、中央の社会主義者の地方遊説、読書会などを通して、印旛郡において初期社会主義結社の北総平民倶楽部が誕生の際には参加することになった。もちろん、この背景には県下のジャーナリズム界のもつ自由主義的雰囲気があったことは間違いないだろう。

他方、小泉由松は「石腸」という号を持っており、地域の文化運動に貢献していた。彼は漢詩文をつくり、地域の漢詩文づくりのネットワークは、地域における文化運動や民衆文化を生み出し、印東文話会のように彼の民権学習の経験が生かされ、政治思想や精神を鍛えていくこととなった。小泉は初期社会主義運動の成果の一つとして、仲間とともに日本社会党員となり、倶楽部の例会、中央の社会主義者の遊説、演説会に貢献していく。ただし、彼は「社会主義思想」をどれ

だけ深く習得しえたかは不文明であるが、自分なりに倶楽部の目的である「労働者の幸福を増進すること」を果たしていったように思われる。ここでいう労働者は、当然農民も対象になろう。

当時の中央の社会主義者は、政府の弾圧もあったけれど、労働者を基盤にもつことはできず、大正時代に入り、「冬の時代」下に、例えば大杉栄らが労働者のなかに入っていくのは、一九一〇代後半になってからである。[30] また、小泉由松は一九一〇年に至っても、初期社会主義者以外の河野広中らとも、年賀状の交換の接触があった。河野は憲政本党時代には、普選運動を政治運動の一つの方針としており、これは平民社の運動方針の一つでもあった。それゆえ、小泉は憲政本党とは、それほど思想的に遠くない位置にいた可能性もあるであろう。社会民主党、平民党、日本社会党は、思想的には「社会民主主義」であり、社会民主党の実際的運動の綱領二八条には、消費税の全廃や普通選挙法の実施、死刑の全廃などブルジョア民主主義的内容が多かった。それを含めて、彼のなかでは初期社会主義運動（思想）と憲政本党との関係を、改めてどのように位置づけていたか検討する必要があろう。史料不足もあるが、今後の課題としたい。[31]

小泉由松を通して、不十分ながら自由民権から初期社会主義への思想の変遷をみてきたが、人物以外にも、地域の雑誌を通じて民権から初期社会主義への変遷を別稿でふれている。[32] これもマイノリティに属すると、私は考えている。

註

（1）拙稿「初期社会主義の一断面」（『民衆史研究』二一号、一九八一年）、同「近代日本における修養思想」（『人民の歴史学』一五〇号、二〇〇一年）、ほか一連の論文を参照。なお、医学史研究は省略する。

（2）「村落社会主義」思想については、拙稿「座間止水の思想的転回―日本における初期社会主義思想の受容の一形態」（『史学雑誌』一〇四編三号、一九九五年）などを参照。

（3）福田英子については、最近映画フィルムを通して、自由民権研究の視野の拡大、豊富化を論じている。これは、民権期の景山英子時代であるが、拙稿「忘れられた映画フィルム―福田英子の『我が恋は燃えぬ』によせて」（『歴史評論』八二一号、二〇一八年）

参照。

（4）マイノリティとしての存在が意識されるのは、一つには「ある領域にたいする政治権力の排他的・専一の支配の確立を挙げ」うると述べることに同意したい（下村由一「序論―ヨーロッパにおけるマイノリティ問題の成立と展開」下村由一・南塚信吾編『マイノリティと近代史』彩流社、一九九六年、七頁）。またマイノリティは、単に数が少ないという意味ではなく、社会学では「マイノリティ minority group」が、「マジョリティ Majortiy group, dominant group」の権力に服従している人々と定義されている。その際、マイノリティはマジョリティが行使する権力によって自身の生活・人生が左右され、不平等な地位におかれる点に最大の特色がある」とした（Richard T. Schaefer, *Racil and Ethnic Groups*, 14th Edition, Pearson, 2014 を参照）。私は、日本の初期社会主義者じたいも、マイノリティに属すると考えている。

（5）拙稿「北総平民倶楽部と小泉由松」（『成田市史研究』二四号、二〇〇〇年）。同「「民権」という経験がもたらすもの」（安在邦夫・田﨑公司編『自由民権の再発見』日本経済評論社、二〇〇六年）。現在、地域において民権から初期社会主義への移行を検討する研究者はいない。

（6）『小泉利夫家文書』一七四、一七五、一七七。以下、『文書』と略す。なお、この文書は一般公開をしていない。

（7）『文書』一七四、一七五.

（8）『朝野新聞』（一八八二・九・一八）。

（9）長沼事件とは福沢諭吉が関与した事件であり、江戸時代いらい長沼を重要な生活源としていた沿岸の長沼村が、明治維新以後その所有権を県側と近隣一五か村によって脅かされたため、その所有権を回復・要求した運動のことである。長沼村の小川武平（用掛、元の百姓代）は、一八七四年にこの係争事件の解決を福沢に依頼した本人である。これについては、拙稿「自由民権から初期社会主義への系譜」（『初期社会主義研究』一一号、一九九八年）を参照。

（10）その結社は一八七九年六月に結成された自立社であり、下埴生郡長沼村、北羽鳥村、南羽鳥村などの社員を中心に設立された。社長は小川武平、副社長は北羽鳥村の野島新兵衛であった。なお、自立社七二名の発起人のなかに南羽鳥村の根本幸太郎がいた。この根本は、実は初期社会主義結社である北総平民倶楽部の幹事の一人である根本隆一の父親であった。自立社は農民的結社といえるが、学習結社・生活結社・扶助結社としての性格をもち、同時に村々に起こる「紛議」の調整をおこない、政治的結社としての役割をも備えており、民権結社と呼んで差し支えないだろう。また、この地域では慶応義塾系の交詢社社員が増えている（拙稿、

同前「自由民権から初期社会主義への系譜」（『初期社会主義研究』一一号、一九九八年）、同「小川武平と自立社・交詢社」（『福沢手帖』一〇二号、一九九九年）参照。これは、福沢諭吉が長沼事件にかかわりがあったことに関係があろう。なお、発起人七二名のなかに、香取郡出身の飯田喜太郎がいる。のちに彼は一八八二年三月、自由党下総部の代表となる部理に就任する。飯田喜太郎については、神尾武則「千葉県の民権結社」（『千葉史学』二五号、一九九四年）。拙稿「近代日本の地域における思想と文化」（『民衆史研究』五六号、一九九八年）などを参照。

(11)　『郵便報知新聞』（一八八四・六・五）。

(12)　『文書』一五。この内容は、一八九二年八月横田対山が小倉良則に送った書簡であり、小倉の過去の事績についてその労をたたえている。

(13)　『文書』一七六。

(14)　『文書』一二。

(15)　『文書』六三、六四、一四一。

(16)　『文書』四四、四七、七九、一一三、『掛け軸文書』2―3・4。

(17)　『掛け軸文書』1―13・14、3―5。

(18)　『掛け軸文書』3―9・10。

(19)　『文書』三五、四一。特に四一は新総房新聞社の創業一周年の記念祝典通知であり（一八九八年一一月）、「貴台初め同志諸賢の深更なる御庇蔭を以て社運日に月に隆盛に趣き候段、社中一同感佩の至りに耐えす候」として、小泉は進歩党系新聞の「同志諸賢」の扱いを受けている。

(20)　『文書』一七九。

(21)　帝国主義・社会主義論争は、『千葉毎日新聞』において、一九〇四年一〇月から翌年八月まで続いている。この論争については、拙稿「村落主義者小川高之助の思想と行動」（『人民の歴史学』七〇号、一九八二年）、同「千葉県における社会思想状況」（『初期社会主義研究』四号、一九九〇年）参照。

(22)　前掲拙稿「北総平民倶楽部と小泉由松」六二～六三頁。

(23)　前掲拙稿「初期社会主義の一断面」ほか、一連の論文を参照。なお、一九〇四年九月平民社の伝道行商の創始者の小田頼三は、

『週刊平民新聞』の読者の多いこの地域をも訪問し、書籍・新聞を売り、読書会を開いているが、小泉もこの読書会に参加した可能性があり、新しい思想である初期社会主義思想の学習にも、かつての民権学習の経験・方法・スタイルが生きており、違和感なく入っていけたと推測できるだろう。全国的にみても、農村において長く継続した初期社会主義結社は、ここ以外は存在しない。

(24) 注（2）を参照。

(25) 『社会新聞』（一九〇七・七・二八）。

(26) 「漫筆手帳」の紹介などについては、前掲拙稿「北総平民倶楽部と小泉由松」を参照。

(27) 『社会新聞』（一九〇八・六・二六）。

(28) 片山潜は一九二九年ソ連において、当時の自身を振り返り、社会主義者として議会主義者であったが、今日のごとき革命家ではなく「合法主義者」すなわち、日和見主義者であったと反省している（片山潜『日本の労働運動』岩波書店、一九五二年）、拙稿「「大逆事件」判決一〇〇年の現代的意味」（『日本の科学者』四六巻一一号、二〇一一年）の注五を参照。

(29) 大正期以後の倶楽部会員の動向については、拙稿「小川高之助論」（『駒沢史学』三五号、一九八六年）、同「「冬の時代」の北総平民倶楽部」（『初期社会主義研究』八号、一九九五年）を参照。

(30) 拙稿「野依秀一と大杉栄―雑誌『近代思想』の時代前後」（『大杉栄と仲間たち―『近代思想』創刊一〇〇年』ぱる出版、二〇一三年）を参照。

(31) 倶楽部の幹事であった小川高之助や根本隆一らは、大正時代以降農村に沈潜していくが、根本は大正時代に、小川は昭和時代に、それぞれ豊住村と八生村の村長に就任している。

(32) 拙稿「マイノリティとしての地域と雑誌―民権から初期社会主義へ」（『初期社会主義研究』二八号、二〇一九年一二月）。

〔付記〕久保田先生には、在職中はいろいろお世話になりました。退職、おめでとうございます。